

# 「漢文訓読Ⅱ記憶術」論 再検証

古田島洋介\*

前号(第五号)の拙論で「漢文訓読は記憶術なり」との仮説を述べたが、多くの点で粗雑なままに終わってしまった。本号ではお二人の漢文訓読に対する根本的な疑問に回答を寄せる形式で「漢文訓読Ⅱ記憶術」論を展開し、どこまで納得のゆく説明が可能か、再び仮説としての有効性を検証してみたい。お二人とは加島祥造氏と井上英明氏である。

## 一

加島祥造氏は漢詩の訓読に関する一連の試論を同人誌「同時代」に発表し、〈古来、日本人は漢詩を訓読して受容してきたが、果たして訓読によって漢詩を詩として味わえるのか〉との疑問を呈した。率直な疑問の開陳が快く、「ひとたび私たちが漢詩文の素養や教養を失なうと、漢詩文の諸単語は外来語から外国語へ転落する」という鋭い指

摘もあり、中途に挟まった富士川英郎氏の応答と相俟って、漢詩訓読、広くは漢文訓読に対する根本的な問題を提起している。<sup>①</sup>

詳細については両氏の文章を参看していただくしかないが、筆者の理解によれば、加島氏の漢詩訓読に対する批判の要点は、〈訓読では、論理性が稀薄で、明確なイメージが浮かびづらい。したがって、漢詩を味わう手段として、訓読は不適当だ〉との一点に帰着する。〈論理性が稀薄で、明確なイメージが浮かびづらい〉とは、どういうことか。加島氏の挙げた具体例を再掲して説明してみよう。

王維の六言絶句「田園楽」は左の如くである。

桃紅復含宿雨	桃は紅にして 復た宿雨を含み
柳緑更帶春烟	柳は緑にして 更に春烟を帯ぶ
花落家僮未掃	花落ちて 家僮 未だ掃かず
鳥啼山客猶眠	鳥啼いて 山客 猶ほ眠る

加島氏は右の第三・四句の訓読に疑念を呈し、次のような訓読のほが詩の論理性を理解しやすく、結果としてイメージも明確になると言う。

花 落つれども	家僮 未だ掃かず
鳥 啼けども	山客 猶ほ眠る <sup>②</sup>

たしかに前者「花 落ちて／鳥 啼いて」よりも、後者「花 落つれども／鳥 啼けども」のほうが論理的な訓読だと言い得るだろう。その論理性によってイメージがいっそう明確になるという主張もうな

ずける。なるほど、漢詩の味読にとって、論理性を表出する訓読のほ  
うがすぐれているという結論は動かさまい。

けれども、「漢文訓読」記憶術」論の立場から見れば、いささか様  
相が異なってくる。なぜなら、訓読の最も重要な役割は、あくまで原  
詩の字句の暗記にあるからだ。つまり、原詩の字句さえ正確に喚起で  
きれば、それで訓読の役目はひとまず充足されるのである。原詩の  
「花落／鳥啼」という字句を覚えるのに、とりあえず最も簡単な訓読  
は「花 落つ／鳥 啼く」だろう。ただし、それぞれさらに下文に続  
いてゆくので、そのままでは口調が悪い。つまり、覚えにくい。そこ  
で「花 落ち／鳥 啼き」と連用形に改めれば、すでに訓読としては  
十分なのである。もちろん、接続助詞「て」を補っても、たいして記  
憶の負担は増えず、かえっていつそう口調がよくなるから暗記しやす  
いと思えば、「花 落ちて／鳥 啼きて」と訓読し、さらに「鳥 啼  
きて」に音便を用いて「鳥 啼いて」と口調をなめらかにする——せ  
いぜいこの程度の配慮でできあがったのが前者の訓読なのである。む  
ろん、それぞれに逆接の「ども」を付けてもさして暗記の負担を感じ  
ない、むしろそのほうが論理的で暗記しやすいと考えれば、後者の如  
く「花 落つれども／鳥 啼けども」と訓読して差し支えない。しか  
し、それは訓読する者が自ら由った結果であり、あくまで任意の措置  
である。訓読に不可欠な原文の字句の喚起という要件から見れば、  
「花／落ちて／鳥／啼いて」で十分だ。要するに、訓読にとっては、  
原文の字句の喚起こそが絶対かつ主要な要求であり、解釈に関わる論  
理性の表出は任意かつ副次的な地位を占めるにすぎないのである。

こうした日本の訓読の特徴は、韓国の現行の漢文読解方式と比較し  
てみれば、いっそう明確になるだろう。論理性に対する配慮という点

では、韓国の漢文読解方式のほうがずっと丁寧だからだ。たとえば、  
散文なら次のような具合である。

尾生이與女子로期於梁下러니女子不來어늘水至不去라가抱梁柱而  
死러라<sup>3)</sup>

『史記』蘇秦伝の一節。有名な故事「尾生の信」の字句である。

「이」は「が」、「로」は「と」、「러니」は「〜であったが」、「어  
늘」は「〜であるものを」、「라가」は「〜まま」、「러라」は「〜であっ  
た」に相当する。韓国では、こうした助詞の類をハングルで挿しはさ  
みつ、漢字は韓国漢字音で発音し、語順を変えることなく、そのま  
ま読み下してゆく。そのありさまをざっと日本語に訳し、訓読による  
書き下し文と対比すれば、次のようになる。

#### 〔韓国式読解文〕

尾生が女子と梁下に期したのだが、女子が来ないので、水が至っ  
ても去らないまま、梁柱を抱いて死んだのであった。

#### 〔日本式訓読文〕

尾生 女子と梁下に期す。女子 来たらず。水 至れども去らず、  
梁柱を抱いて死す。

両者の相違は一目瞭然だろう。韓国では句と句の論理的なつながり  
が丁寧に表出されているのに対し、訓読は実にぶっきらぼうだ。つま  
り、韓国式読解文がつけよう、つながるうとして進んでゆくのに対

し、日本式訓読文は切ろう、切れようとしながら進んでゆくのである。原文の字句の暗記が当面の目的となれば、句と句のつながり方なぞ二の次の問題にすぎず、それよりは記憶の負担を軽くするために簡潔性が重んじられるからだ。

むろん、「期す」を「期するも」、「来たらず」を「来たらざるに」などと訓み、論理的につながるように訓読してもかまわない。訓読でも、論理性の表出は決して不可能ではない。しかし、肝腎なのは、可能ではあっても、必須ではないという点である。

また、いわゆる漢詩についても、やはり韓国では助詞の類をハングルで挿入しつつ、句と句とのつながり具合を示してゆく。孟浩然の有名な五言絶句「春暁」を例に挙げてみよう。

春眠不覚曉라니 処処聞啼鳥라  
夜来風雨声하니花落知多少아

「라니」は「〜であったが」、「라」は「〜だ」、「하니」は「〜だから」、「아」は「〜だなあ」に当たる。先の例と同じく、対比を試みれば――

#### 〔韓国式読解文〕

春の眠りは暁を覚えなかったが／処処に啼鳥を聞くのだ  
夜来 風雨の音がしていたのだから／花はどのくらい落ちたのだろうかなあ

#### 〔日本式訓読文〕

春眠 暁を覚えず／処処 啼鳥を聞く  
夜来 風雨の声／花 落つること 知んぬ 多少ぞ

右のように見てくれば、韓国の漢文読解法に比べて、日本の訓読がいかに論理的なつながりにそっけないか、逆に言えば、いかに簡潔にすませ、記憶の負担を軽減しているかがわかるだろう。記憶術たる訓読は、なによりも原文の喚起力こそが肝要であり、その内部における論理関係は、せいぜい二の次の関心事にすぎないのである。

もちろん、漢詩の訓読が論理的でないのは、もともと論理性を表わす言葉がないから、それを訓読でも一切省くのだという説明も可能だろう。語と語、句と句のあいだの飛躍こそ漢詩の特徴だとする立場である。たとえば原田種成氏は、王維の名高い五言絶句「竹里館」の第一句「空山不見人」の訓読として、「空山に人を見されども」を非とする。漢詩の表現の特徴である「飛躍を限定しているので賛成しかねる」というわけだ。原田氏が推奨する漢詩訓読は「ブツリブツリと切つて、断絶は断絶のままに読んで」ゆく体のものであり、「空山 人を見ず」を是とするのである。<sup>5)</sup>

ただし、原田氏の説明は、漢詩の訓読であれば、それなりに筋が通るが、漢文すなわち散文の訓読にも通じるとなると、いささか懸念が残る。特に論説文など、論理の展開に重みのかかる文章についてまで、論理性を表わす語を補う訓読を非とし、「ブツリブツリと切つて、断絶は断絶のままに読んで」ゆく訓読を是とする理由にはなるまい。いや、論説文とまで言わずとも、筋立てを重んずる史書のなかの一場面でさえ、論理性を表わす言葉がないからといって、ブツ切り訓読を

擁護する理由にはならないだろう。たとえば『史記』項羽本紀の有名な「鴻門の会」の一節「范増数目項王挙所佩玉玦以示之者三。項王默然不応」は、おおむね次のように訓読するのが一般である。

范増<sup>しほ</sup>数<sup>しば</sup>しば項王を目し、佩ぶる所の玉玦を挙げて、以て之に示す者三たびす。項王默然として応ぜず。

けれども、左のように論理関係を表わす語を補って訓読しても、もちろん間違いとは言えない。

范増数しば項王を目し、佩ぶる所の玉玦を挙げて、以て之に示す者三たびすれども、項王默然として応ぜず。

「三たびすれども」は「三たびなるも」と訓んでもよいだろう。とにかく、逆接の関係を明示し、文と文をつなげて訓読するわけである。果たして、どうだろうか。逆接を示す言葉が原文にないのだから、前者のブツ切り訓読のほうがよいと言い切れるだろうか。後者のつなげた訓読のほうが、論理関係がはっきりしているだけイメージも明確で、訓読としてすぐれている、と言われたら、説得に困るのではないだろうか。

ここでも「漢文訓読Ⅱ記憶術」論の立場からすれば、説明に困らない。原文の字句の暗記には前者のブツ切り訓読で十分であり、後者のようにつなげた訓読では、長たらしいだけ、かえって記憶の負担が増して不都合なのだ。むろん、つなげたければ、つなげてよい。しかし、論理関係を示していないからといって、前者のブツ切り流を非難

する理由にはならない——これが回答である。漢詩においても、そして漢文においても、「漢文訓読Ⅱ記憶術」論によって、統一された説明が可能なのである。

ちなみに、右に後者の訓読を「長たらしい」と形容したが、少し訓読になじんだ目で後者を読めば、ただちに「長たらしい」という印象が浮かんでくるのではないかと思う。それは、記憶の負担を減らすために短く切れようとする訓読の簡潔性に慣れた結果、自然にできあがった訓読文の長短に対する感覚ゆえなのではなからうか。

## 二

井上英明氏は『異文化時代の国語と国文学』で次のように記している。

わたしは高校生のころ、一年生から三年生までSという漢文の先生がクラスの担任であった。S先生が独特の名調子で漢文を訓読するのを聴くのがいつも心愉快だったが、現代人のわれわれ日本人がなぜいまだに漢文を文語体で訓まなければならないのか、いかにも怪訝でしかたがなかった。〔中略〕（陶淵明の）「帰去来兮、田園将蕪……」をなぜ現代日本人が「さあ帰ろうよ。田園は今や蕪れようとしている……」と訓み下してはいけないのか、今になお疑心暗鬼のままである。

ここでは二つの問題が提起されている。第一は、なぜ訓読には文語体が用いられるのかという一般的な問題。第二は、なぜ「帰去来兮、田園将蕪……」を「さあ帰ろうよ。田園は今や蕪れようとしている……」

と訓読してはいけないうのかという個別的な問題である。

便宜上、順序を逆にして、第二の問題から考えてみよう。

率直に言って、「さあ帰ろうよ。田園は今や蕪れようとしている……」を「帰去来兮、田園將蕪……」の訓読だと考える人はいるまい。いわゆる専門家なら、首を振りつつ一笑に付して終わらさう。だが、それだけに井上氏の正面切った問題提起はなかなか面白く、訓読とは何かを論じることなくすませてきた関係者の怠慢に対する痛烈な皮肉とも聞こえる。「そう訓読することになっているのだから、そう訓読しておきなさい」式の説明で押し通してきた付けがいに回ってきたのである。

さて、誰が見ても訓読とは思えぬ「さあ帰ろうよ。田園は今や蕪れようとしている……」は、果たしていかなる理由で訓読として成立しないのだろうか。おそらく誰もが一致する一つの理由は、文語体ではなく、口語体であるという点だろう。しかし、これは第一の問題と重なるので、後ほど改めて論じることにする。もう一つの理由は、訓読の〈型〉にはまっていけない点である。「将」は「まさに」（せんと）す」と訓む再読文字だ、「いまや」（し）ようとしている」は解釈または翻訳であって、訓読とは言えない、と。

だが、この説明では、井上氏は納得しまい。「田園は今や蕪れようとしている」を解釈と呼ぶなら、それで結構。翻訳と称するなら、それでも結構。文章を解釈している以上、解釈または翻訳が果たされれば、それで十分ではないか。なぜ煩わしいことこのうえない訓読なぞ介在させる必要があるのか——こう畳み掛けられたとしたら、たいいは返答に窮するのではあるまいか。ここで問われているのは、やはり訓読とは何かという本質的な問題なのである。

では、「漢文訓読Ⅱ記憶術」論の立場から回答を寄せてみよう。井上氏の記した読み方の後半「田園は今や蕪れようとしている」を訓読として排斥するのは容易である。なぜなら、この読み方では原文「田園將蕪」が正確に暗記できないからだ。聴覚記憶にたくわえられた「デンエンはいまやあれようとしている」という音列を聞けば、「田園……蕪」の三字は脳裏に喚起される。「蕪」字がいささか心もとないが、そこは視覚記憶によって「荒」を排し、「蕪」と再生するわけだ。けれども、「いまや」（し）ようとしている」から「将」字を再生するのは無理であろう。「将」を「いまや」（し）ようとしている」と訓読する習慣が成り立っていない以上、「いまや」（し）ようとしている」にはまった訓読「田園將に蕪れんとす」は原文の字句の喚起力にすぐれているのだ。これこそ訓読の〈型〉の正体である。

もっとも、井上氏の読み方の前半「さあ帰ろうよ」については、同じような説明ですませるわけにいかない。なぜなら、「さあかえろうよ」から原文「帰去来兮」を再生できないのと同様、伝統的な訓読「かへりなんいざ」をどういじくったとて、やはり「帰去来兮」四字を復原できないことも明らかだからである。

この「帰去来兮」について、井上氏は一つの場面を記している。

ふたたび冒頭の一句、「帰去来兮」が来た。それでこれをこんどは、「帰り去り来リヌ」と訓んでしまった。そこでまたS先生曰く、「そこはやはり〈帰りナンイザ〉と訓むのだ」と。

「でも、淵明はすでに自宅に帰って来ています。途中から、〈さア帰ろうよ〉では時間の進行において矛盾しているのではないです

か」とわたし。「いや、そこは冒頭の句を繰り返すことによって、段を改めて説き進む方法で、「帰って来た以上は」と訳さなければならぬ」とS先生。<sup>7)</sup>

「帰去来兮」の訓読をめぐるS先生と若き井上氏とのやりとりである。両者の相違は明らかだろう。井上氏は、時間の流れのうえでの矛盾を理由として、再び登場した「帰去来兮」を「帰り来りヌ」と訓読した。要するに、訓読は翻訳であるとの立場から、なんとか訓読と翻訳を一致させようとしているのである。それに対し、S先生は、訓読と翻訳を区別し、いくたび現われようが「帰去来兮」は一律に「帰り来りヌ」と訓読しておき、ここでは確かにもう帰ってきているのだから「帰って来た以上は」と翻訳せよと教えているのである。「漢文訓読II記憶術」論の立場から見れば、翻訳に一致させようとする井上氏の訓読方式は訓読に対する誤解であり、S先生の訓読方式のほうが正しい、いや、S先生の訓読で十分だということになる。

ただし、それでも「かへり来りぬ」から原文「帰去来兮」が再生できるという説明にはならない。いったい、「帰り来りヌ」と訓読しているS先生の頭のなかで、どのような作業が行なわれていたのだろうか。井上氏が再び現われた「帰去来兮」について用いた訓読「帰り来りヌ」のほうが、かえって「去来」の二字の復原には有利なくらいではないか、との疑問さえ起こるだろう。

だが、これに対する回答は至って簡単である。古来、「かへり来りぬ」が「帰去来兮」の訓読として固定されているからだ。「去来」の音訓が見当たらずとも、「兮」など影も形もなくとも、「かへり来りぬ」と聞けば、ただちに「帰去来兮」の四字がまるごと脳

裏に浮かぶ習慣になっているのである。それは「まさに」(せんと)す」とくれば、即座に「将」字を想い起こすのと同じ理屈にほかならない。要するに、「かへり来りぬ」は「帰去来兮」四字全体の定訓なのである。

実際は、「帰去来兮」の訓読にはそれなりの歴史があり、ただ「古来」と言ってすませられるほど単純ではない。奈良時代には「かへり来」と訓読されていたという。上の「な」は完了の助動詞「ぬ」の未然形、下の「な」は願望を表わす終助詞である。それが平安時代初期に「かへり来りぬ」、平安時代中期以降は音便で「かへり来りぬ」と訓じられるようになり、さらに一つの音便「ん」が先祖返りを起こして「かへり来りぬ」となった。しかし、とにかく「帰去来兮」の四字をまるごと読む訓法が長きにわたって行なわれてきたことは間違いない。その結果、「かへり来りぬ」という音列が「帰去来兮」という文字列に対応する習慣ができたのである。<sup>8)</sup>

さて、第二の問題についての論議がかなり長くなった。このあたりで、第一の問題に話をもちよすことにしよう。なぜ現代人である我々が古語を用いて漢文を訓読する必要があるのかという問題である。

「漢文訓読II記憶術」論の原理から察していただけだと思うが、要するに原文の字句の暗記に有利でさえあれば、現代語による訓読も可能はずなのである。右の第二の問題に関する論議のなかで言及した訓読を例にとれば、「将」を「いまや」(し)ようとすると訓むことに決め、「帰去来兮」を「さあかえろうよ」と訓む習慣が固定すれば、現代語による訓読でも記憶術として成立する可能性はある。ただし、実際には技術的に数多くの困難を伴い、たとえ実現したとしても、本質的な疑問が新たに生じるうえ、大きな弊害を生み出す恐れがある。

技術的には、漢文で常用される字すべてについて、改めて定訓を決めなおす必要が生じる。たとえば、「豈」は「あに」と訓じられてきたが、「あに」をどのような現代語に替えるのだろうか。さしあたり「なぜ」と訓ずるとしても、「何」を「なんぞ」と訓読するのをやめて、やはり「なぜ」と訓むことにしたりすれば、「なぜ」と訓読して暗記したとて、原文が「豈」なのか「何」なのか、わからなくなってしまう。このような判別が可能ないように、常用字の訓を決めなおさなくてはならない。「豈」は「どうして」とでも訓読するのだろうか。そして、もし実現したとしても、結果として、新たに覚えなければならぬ訓が大量に発生するだろう。それは、かえって記憶の負担を増すだけではないのか。

また、現代語で訓読するとなれば、音節数の増加が避けられまい。「べし」を「べきだ」にする程度なら、一音節の増加ですむ。しかし、「輒」の訓「すなはち」を捨てて、「そのたびごとに」などと訓むことになれば、音節数はかなりの割合で多くなり、各訓の微増やら大幅増加やらが積み重なれば、最終的に相当な記憶の負担を強いられることになる。その結果、記憶術にどうしても要求される簡潔性の原則が崩れてしまうだろう。それでは記憶術として役に立たない。

一方、本質的な問題が生ずることもわきまえておく必要がある。「帰去来兮」を「さあかえろうよ」と訓むことになれば、それはもはや訓読と呼ぶ必然性を失い、翻訳と称すべき性質のものとなるだろう。原文と翻訳とのあいだに敢えて訓読を介在させる理由がなくなってしまう。つまり、現代語による訓読は、訓読不要論、訓読廃止論へと直結する可能性を有しているのである。

さらに、現代語による訓読が成立したならば、伝統的な訓読が捨て

去られる結果、旧来の漢文訓読から派生した訓読表現が理解できなくなるため、漢文訓読体の日本語が読めなくなるという弊害が生まれる。端的に言えば、今日ただでさえ読解に困難を覚える明治・大正時代の文語文が、ますます遠い存在となってしまっているのである。これは我々の文化にとって有利なことだろうか。

右のように、現代語による訓読には、さまざまな困難や疑問や弊害がからまってくるはずだ。これをすべて理路整然と克服・解決・除去してみせてこそ、はじめて現代語による訓読が実現されるのである。果たして可能だろうか。いささか、いや、大いに雲行きが怪しい話ではないだろうか。

以上、冒頭の引用で提起された二つの問題に回答を寄せてみた。もう一つ、井上氏がS先生との興味深いやりとりを記しているので、それも考えておくことにしよう。

〔陶淵明「帰去来辞」の〕「南牕二倚リテ以テ敖ヲ寄セ」のつぎ、  
「審容膝之易安」を「審カニス、膝ヲ容ルルノ易安ナルヲ」と訓んでしまった。すかさず「そこはおかしいネ。〔膝ヲ容ルルノ安ンジ易キヲ審カニス〕と訓むんだよ。易安という熟語はない」とS先生。

「漢文はどうせ日本語に訳しながら訓む、つまり同時通訳みたいなもんですから、易安がダメなら安易ということばがあるので、ボクの訓み方ではやはりダメですか。安ンジ易キヲ審カニス……など、訓読文の方がボクにはむづかしくて、何の意味だか分かりません……」とわたし。<sup>9)</sup>

問題点は一読して明らかだろう。井上氏が原文「審容膝之易安」に付けた訓読「審カニス、膝ヲ容ルルノ易安ナルヲ」を、S先生が「膝ヲ容ルルノ安ンジ易キヲ審カニス」と修正してみせた場面である。

まず「審」の処理の食い違いが目につく。井上氏のように「審カニス」とするか、またはS先生のごとく「スヲ審カニス」とするかである。

ただちに想起されるのは、散文の訓読といわゆる漢詩の訓読との相違である。たとえば、王維の五言絶句「竹里館」の起句「独坐幽篁裏」は、漢詩としては「独り坐す 幽篁の裏」と訓読するが、もし散文ならば「独り幽篁の裏に坐す」と訓むところである。また、李白の七言絶句「黃鶴樓送孟浩然之廣陵」の結句「惟見長江天際流」も、やはり漢詩としては「惟だ見る 長江の天際に流るるを」と訓読するが、散文ならば「惟だ長江の天際に流るるを見る」とでも訓読するのがふつうであろう。一般に、漢詩の訓読は、原詩の律動性を重んじるため、なるべく返り読みを避けるわけだ。

もっとも、くだんの「歸去來辭」は漢詩にあらず。井上氏のように「審カニス」と訓じて間違いではないが、そのように訓読する積極的な理由は見当たらない。やはりS先生のごとく「スヲ審カニス」と訓むのが穏当な訓法であろう。

次に気づくのは——言うまでもなく、こちらが肝腎な点だ——「易安」を井上氏のようにそのまま音読みで「イアン」とするか、またはS先生のごとく訓読みで「やすんじやすし」と返り読みするかである。井上氏はこう主張している——どうせ訓読みしても理解しづらいのだから、「安易」という熟語もあることだし、そのまま「イアン」と音読みしておけばよいではないか——と。それに対して、S先生は言う

——「易安」という熟語がない以上、音読みですませるわけにはいかない。訓読みして「やすんじやすし」とするのが妥当である——と。

井上氏が言うように、訓読が「日本語に訳しながら訓む、つまり同時通訳みたいなもの」のだとすれば、理解しづらいという点で、なるほど音読みの「イアン」も訓読みの「やすんじやすし」も五十歩百歩だろう。いづれも可との結論に落ち着くものと思われる。

しかし、今一步はっきりした説明にはならなかったものの、S先生の〈「易安」という熟語がない以上、音読みは避けるべきだ〉との説明は、やはり伝統に則った悔りがたい見解だと察せられる。つまり、訓読が原文暗記のための記憶術だとすれば、S先生の主張はすんなりと納得できるのである。

一般に、二字または二字以上の漢語を音読みした場合、それが熟語であれば、すでに発音に対応する文字列が頭のなかにたくわえられているのであるから、ただちに我々はその漢字を脳裏に浮かべることができる。同音の熟語がある場合でも、少なくともいくつかの候補の文字列が脳中に喚起されよう。だからこそ、熟語と呼べるのである。「アンイ」とくれば、まず間違いなく「安易」の二字が喚び起こされる。「ソウゾウ」と聞けば、まずは「想像」か「創造」に絞られるだろう。けれども、問題の「イアン」はどうか。ふつうは「慰安」の二字が脳裏によぎるだろう。「易安」の字面が念頭に浮かぶ人はいまい。この点で、熟語にあらずる「易安」の音読みは、原文の暗記にとって甚だ都合なのである。もし音読み「イアン」ですませるならば、「易安」二字の記憶はもっぱら視覚に頼ることになる。記憶の負担は決して軽くあるまい。

ところが、訓読みで「やすんじやすし」と返り読みしておけば、まっ



たく話が違ふ。「易V」を「しやすし」と訓む訓読の基礎事項さえわきまえていれば、一般に「やすんじ」の音列から「安」字を想い起こし、原文を「易安」と確定するのにさしたる時間は要すまい。つまり、「漢文訓読」記憶術」論の立場から、S先生の主張を改めて噛み砕いて記せば次のようになる——我々の脳中に熟語として「易安」が存在しない以上、「イアン」と音読みしても、「易安」の二字を喚起できる保証はない。したがって、これは訓読みで「やすんじやすし」と訓むべきだ。そうすれば、原文「易安」がさほどの負担なしに再生できるだろう。

井上氏とS先生の食い違いは、訓読観の相違から生じたものである。そして、おそらくS先生の訓読観は、本稿の「漢文訓読」記憶術」論に合致するものであったことだろう。その意味で、S先生の訓読は伝統に根ざしたものののだ。S先生御自身は記憶術などという怪しげな言葉は振り回さなかったことだろう。また、薄々そう考えていらっしたとしても、高校生には理解しづらいと思つて、口になさらなかったのかもしれない。だが、その「熟語にあらざれば音読みすべからず」の基本姿勢は、「漢文訓読」記憶術」論によってこそ明確に説明し得るものと愚考する。

冒頭の引用で、井上氏は「S先生が独特の名調子で漢文を訓読するのを聴くのがいつも心愉しかった」と記していた。たぶんS先生は、訓読文を独特の節回しに乗せ、暗記の助けとしていたのだろう。旋律に乗った歌詞が覚えやすいのと同じく、少しでも訓読文に音楽性が伴えば、それだけ聴覚記憶にとって有利だからである。

ちなみに、井上氏の次の一節についても、「漢文訓読」記憶術」論による問題解決が可能である。ロンドン大学で、井上氏が学生に「易

「易」を英訳させる授業を担当したときの話である。

（『莊子』応帝王篇の末尾「南海之帝為儵、南海之帝為忽、中央之帝為渾沌……」の訓読）「南海の帝を儵と為し、北海の帝を忽と為し、中央の帝を渾沌と為す……」を、まず、「為す」というのは、主語がない。いったい、誰が南海の帝を儵と「為す」のか、中国にも日本にも『聖書』でいうGodがいるはずがない。わたしは「為す」を「為ぶ」と訓んでもよいと言った。<sup>⑩</sup>

この「しを……と為す」はなかなか紛らわしい訓読で、「以し為……」を以て……と為す。「しを……にする」意の「以」（以て）が省略された構文のみならず、「しを……」は……「しは……である」意／しを（は）……と為ふ。「しを（は）……という（呼ぶ）」意の訓読としても常用される。実は、この『莊子』応帝王篇の文章は後者「しを……」の構文であり、「南海の帝は儵<sup>た</sup>為り、北海の帝は忽<sup>た</sup>為り、中央の帝は渾沌<sup>た</sup>為り」と訓んでもよいし、「南海の帝を儵と為ひ、北海の帝を忽と為ひ、中央の帝を渾沌と為ふ」と訓じてかまわない。井上氏によると、ロンドン大学に在籍していた中国系マレーシア人の学生が「為」を現代中国語で「名」（という名である）と訳してみせたことから、結局「為」は「名」と訳すことになったそうだが、それで理にかなっているわけである。この文の場合、「為す」の主語について気づかうのは徒勞に近い。前者の「以し為……」の「以」が省略された構文ではないからだ。なお、井上氏は「易」と訓んでもよい」と述べた由だが、それでも誤りとは言えないものの、「為ふ」のほうが訓読の習慣に合うだろう。

もっとも、ここで当然、なぜ「為」を端的に「為り」または「為ふ」と訓まず、さも誰かがそう為したかのように「為す」などと訓読するのか、苛立ちの声が起ころう。これだから訓読はたちが悪い、当てにならぬ、と。

しかし、すでにおわかりのとおり、この「為」字を記憶するには「なす」の訓を以て暗記しておくのが最も便利なのである。「たり」と訓じると、原文が「為」字抜きで「南海之帝儵、北海之帝忽、中央之帝渾沌」と再生されてしまう可能性を捨て切れぬ。また、「いふ」と訓んだとしたら、「為」よりも「曰」や「謂」が優先的に脳裏に浮かんでしまうだろう。やはり、いずれも「為」字を喚起するには不都合なのである。

もっぱら解釈・翻訳に意を注ぐ後世の我々の目には、一見このような「為」を「なす」と訓じた先人の営みが不合理に見え、すぐに意味の通じる「たり」「いふ」のほうが合理的に映る。けれども、実は然らず。「漢文訓読」記憶術」論を以てすれば、「たり」「いふ」のほうこそ不合理で、むしろ「なす」のほうが合理的なのだ。

以上、加島祥造氏と井上英明氏が提起した訓読に関する疑問に、「漢文訓読」記憶術」論の立場から回答を寄せてみた。果たして、どれほどの説得力があるだろうか。いづれの問題についても、「原文の字句の喚起に好都合だ」「原文の記憶に便利だ」との趣旨を繰り返した述べたので、いささか食傷した向きもあるだろう。しかし、千篇一律、実際そのような画一的な議論で常に説明が可能となれば、とりもなおさず、記憶術が漢文訓読に通底する原理として存在することの証明にもなるかと思考する。

本年（平成十年）三月末を以て本学科を定年で御退任なさる島田良二教授から、前号（第五号）の拙論について、「コロンブスの卵みたいなものですね」との御感想をいただいた。畏敬する碩学が御感想をお聞かせくださるとは光栄の一語につきる。しかし、当該拙論の末尾に付記した如く、「漢文訓読」記憶術」論の発想の原型は鈴木直治『中国語と漢文』（本稿注（8）所掲）にあり、拙論は鈴木氏の発想をいっそう明確にすべく「記憶術」なる言葉を用い、記憶術こそ漢文訓読の原理であると強く訴えているにすぎない。鈴木氏の「コロンブスの卵」を腐らせることなく、無事に同僚の方々の滋養に供することができればと切望するばかりだ。それが御退任後の島田先生に対する何よりももの贈り物にもなるかと思う。

次号では、伝統的な訓読に対する各種の批判・非難を具体的に挙げ、「漢文訓読」記憶術」論の立場から反論を試みる予定である。

#### 【注】

- (1) 加島祥造・富士川英郎両氏の文章は次のとおりである。  
加島 「有路の話」／「同時代」第三号（昭和五十三年）  
加島 「漢詩和訳の話」／「同時代」第三十八号（昭和五十六年）  
富士川 「漢詩和訳の話」／「同時代」第三十九号（昭和五十六年）  
加島 「再び漢詩和訳の話」／「同時代」第四〇号（昭和五十七年）  
加島 「漢詩和訳の話」その拾遺的試論／「同時代」第四七号（昭和六十二年）  
「ひとたび私たちが漢詩文の素養や教養を失なうと……」は、加島「再び漢詩和訳の話」一頁下に見える。
- (2) 注（1）所掲「再び漢詩和訳の話」一三頁下～一四頁上。加島氏が問題とする第三・四句の訓読は、小村定吉『邦訳支那古詩（唐代篇）』（椎の木社、昭和十年）八一頁に見える。表記および字間について、多少の変更を加えた。なお、王維の当該詩は版本によって字句の相違があり、作者についても疑点が残る。詳しくは（清）趙殿成『王摩詰全集箋注』巻十四に見える当時の校異（台湾・世界書局版、二〇一頁）を参照のこと。
- (3) 李明學『TV教養漢文』（EBS放送、一九九四年九月四日～九五年二月二十六日／高麗出版社、ソウル、一九九四年）四六頁。
- (4) 同右書、二一〇頁。

- (5) 原田種成『私の漢文講義』(大修館書店、平成七年) 一一二～一一四頁。
- (6) 井上英明『異文化時代の国語と国文学』(サイマル出版会、平成二年) 一三二・一三五頁。
- (7) 同右書、一三四頁。
- (8) 「婦去来兮」の訓法については、山田孝雄『漢文の訓読によりて伝えられたる語法』(宝文館、昭和十年) 六八～七三頁、小林芳規『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』(東京大学出版会、昭和四十二年) 四三二～四三三頁、鈴木直治『中国語と漢文——訓読の原則と漢語の特徴』(中国語研究学習双書) 三、光生館、昭和五十年) 三三～三四頁などを参照のこと。文法的には、「婦」が「かへりなん」、「去来」が「いざ」、「兮」は助辞と分析できる。しかし、実際に訓読するさいは、「婦去来兮」の四字全体で「かへりなんいざ」と訓む意識が強く働いていたものと推測する。ただし、例外なく誰もが「かへりなんいざ」と訓んできたわけではない。たとえば林羅山は「かへりさらめや」と訓読していた(『漢籍国字解全書』第十二卷『古文(真宝)後集』(早稲田大学出版部、昭和二年) 二四頁下)。
- (9) 注(7)に同じ。
- (10) 注(6)同書、一三六～一三七頁。
- (11) 同右書、一三七～一三八頁。